生々しく残る「倒幕の密勅」

増山雄三

革命というのは、その最終段階になれば、稀代の陰謀の才を必要とするが、日本の明治維新にあってその魔術をやってのけたのは、一人は公卿の「岩倉具視」で、もう一人は薩摩の「大久保利通」の二人である。

それについて岩倉は、明治になって、「この時期、二人で秘めやかに語り合った内容については、時が過ぎても余人には語り難い」と語っているが、それは本音であって、歴史という生きた舞台で、戦慄的なそれをやった人物の、足跡というのは、あたかも魔性のように、血腥く濡れているのだろう。

その濡れた足跡の一つが、「倒幕の密勅」という二通の文書で、よく見るとなるほど奇怪なもので、幼帝明治天皇の勅とはいえ、帝の正式の補佐官である、二条斉敬の名は出て

おらず、帝の外祖父・大納言中山忠能と、三条実愛に中御門経之という、場違いの公卿の名が「勅を奉じた」として、自筆でなく他人の筆跡により、連名で出されている。

それで二通は同文で、一通は薩摩藩主宛てで、もう一通は長州藩主宛てで、その内容というのは、多年にわたる幕府の暴政を攻撃して、「汝よろしく朕の心を体し賊臣慶喜を殄戮し、すみやかに回天偉勲をするのが、朕の願いであり、あるひは懈るなかれ」とある。

ときに、慶応三年（一八六七年）十月で、孝明天皇崩御のあと、すぐ明治帝が践祚されたが、この密勅の時期に新帝はまだ満十八才にすぎず、当然ながらこの年齢で、これほど重大な勅命を下せる、政治的判断力が成熟していたとは、普通はまずありえない。

帝は、生母の実家である中山忠能の屋敷で成人し、外祖父だった忠能が、養育掛をしていたものの、忠能は忠実な性格で、古典主義者でもあったので、岩倉はこの忠能を籠絡し

て、巧妙な操縦で踊らせ、この歴史的な大狂言の、名義上の勧進元にされてしまった。

徳川幕府は、日本史のあらゆる政権の中でも、ずば抜けた密偵能力を持っていたが、それでも、この「**倒幕の密勅**」の事実は知らずに、新撰組は、岩倉が他の者と連絡するのを警戒していたが、彼はこれに対し、自分の息子を童形にして、密使に仕立てるなどして、自分の行動を、彼らの目から眩ませていた。

一方、密勅で賊臣とされ、殄戮されるはずの将軍慶喜は、幕府が衰微しているとは知っていたが、運命を一変させる事態が、秘密裏に進行している事を知らず、この密勅はそういう情勢の中で、降下されたのである。

ところが、この幕末混乱を収拾すべく、坂本竜馬が、「**大政奉還**」という奇策を慶喜に勧めたので、慶喜は譜代大名にも諮らず、独断でそれを決め、翌日、それを朝廷へ奏聞して公的にしたが、それは偶然にも、岩倉が作った密勅降下完了の日と、一致していた。

岩倉は狼狽したが、ともかく闇の中で生まれた密勅を、内密に無効にしたが、稀代の陰謀家の行なった、最大の犯罪の証拠物件が、このような形で「生々しく残っている」事には、いささか目を背けたい眩さを感じる。

令和四年六月